

東京経済大学報

2012年度 第45巻 第2号

十一
×
÷
TOKYO
TOP30
計画

四つを、守る。

創立者・大倉喜八郎は、111年前、学生たちに、
社会で活躍するために守るべき四つのことを語っています。

(大倉商業学校演説集 明治35年)

第一に 正直でなければならぬということである。

第二には 進取の観念というのを頭脳に注入することが最も必要だ。

第三には 義務を果たす根性が強くなければならぬ。

第四は 辛抱すなわち忍耐ということである。

進取の観念をもって、T O K Y O T O P 3 0 計画。

新たな一年、出発に際して

東京経済大学 学長 久木田 重和

新年明けましておめでとうございます。皆さまから旧年中に賜りました温かいご支援、ご協力に対しまして厚く御礼申し上げます。新しい年が皆様にとりまして実りの多い幸せな年であることを心より祈念申し上げます。

大学を取り巻く環境は、極めて厳しいものがあります。その中で、113年の伝統を継承しつつも、それに甘えることなく、改革を重ね、新たな伝統を築いて、質の高い大学に飛躍するために、創立110周年に際して「TOKYO TOP30計画」を宣言しました。それは、教育品質、研究実績、就職満足度、学生支援、環境の良さ、国際性、社会貢献において、首都圏の国公立私立200あまりの大学の中で上位に入ることを目指していくビジョンです。全学を挙げてその推進に邁進しています。

大学の近年の取り組みは、外部でも高く評価されています。例えば、全国の進学校といわれる高校の進路指導担当教諭を対象に実施された調査（大学通信）によれば、東京経済大学は2012年12月、大きすぎず評価できる大学として、全国の私立大学中でトップ10入りしました。これからも、大学の特色を最大限に活かして、主役である学生の皆さんが快適な環境のもとで勉学や課外活動などに励み、満足度が最大になるように教育品質の向上、学生支援の強化などに鋭意努めてまいります。

本年もどうぞよろしく、お願い申し上げます。

謹んで新春のお喜びを申し上げます。皆様にはこれまでの本学へのご協力に感謝申し上げます。

私立大学を取り巻く環境は、18歳人口の長期的減少傾向と大学進学率が50%を超えた現状等から、一層厳しさを増しています。多くの私立大学は定員割れの状況で需給バランスは崩れており、大学間競争の激化と統廃合の時代を迎えようとしています。これらに対応して、本学は、建学の精神や教育理念に基づく教育研究活動の将来にわたる発展のために、法人と大学とが一体となった改革を進めることが求められています。学長ビジョンは、本学の建学の理念を具現化しながら、教育・研究のみならず、学生支援や社会貢献、環境への配慮等広い分野でバランスのとれた総合力を発揮することを目指しており、法人は中長期的な事業計画・経営ビジョンを策定し、着実に実現するための財政支援を行うこととしました。

また、国分寺第一期キャンパス整備計画は順調に推移し、新5号館が昨年の春から稼働し、引き続き、新図書館の建設が秋から開始されました。新図書館竣工後の2014年度に現図書館を大規模改修し、「大倉喜八郎進一層館（通称Forward Hall）」を名称とすることも決定しております。改修計画費用の一部を学内・卒業生ほか関係先に寄付をお願いすることとし、現在、改修計画協賛募金に取り組んでおります。

本年も、皆様のご協力宜しくお願い申し上げます。

学校法人東京経済大学 理事長 岩本 繁



東経大の
社会貢献 1

東日本大震災 復興支援ボランティア

2年目の真実

私たちが
見たもの、感じたこと

東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に
甚大な被害をもたらした東日本大震災。

発生からこの春で2年を迎えるが、
メディアをはじめ、社会の関心は
次第に薄れつつある。

だが、被災地ではいまなお
多くの人々が復興への厳しい
道のりを歩いている。
現地に赴いたからこそ見える
課題、感じる希望を
職員、学生の声で紹介する。

延べ300名の
学生、職員が被災地で活動

2011年7月、震災直後から活動
して来た本学職員有志は「東京経済大
学・東日本大震災復興支援職員有志の
会」を立ち上げた。ただちに被災地へ
の学生派遣を企画、これを本学は、創
立110周年を機に打ち出した「TOKYO
TOP30計画」の一環として、

「学内グッド・プラクティス（学内GP）」に採択した。昨年度は8月から
11月にかけて、「父母の会」の支援も受

けながら、計5度にわたって延べ13
5名の学生（留学生を含む）と職員が
ボランティアとして岩手県陸前高田市
や宮城県南三陸町・七ヶ浜町などで復
興作業を行った。そして2012年度
8月から12月にかけて、延べ160名
の学生（留学生を含む）と職員がボラ
ンティアとして被災地に赴いた。

被災地の復旧復興の状況は、その土
地によって大きく異なる。だが、岩手
県や宮城県の沿岸部などには、今なお
多くの災害ボランティアを必要とする
地域も多々ある。本学職員有志が息長
く活動を続けるのは、そうした被災地



2012年9月9日、本学有志が仙台市若林区の畑跡地で細かい石や瓦礫などの撤去作業を行いました。そして2か月後の11月18日、同地を再度訪れたところ、荒地が見事な畑に復活していました。少しずつ、しかし確かに、東北は復興の道を歩んでいます。



「東京経済大学」ののぼりを立てて作業の様子を見た地元の人が、「東京経済大学がわざわざやってきてくれた。ありがとうございます」と、ブログに書き込んでくれたこともあります。東経大生へりんごを差し入れてくれた住民もいましたし、活動にきている卒業生が話しかけてくることも度々ありました。こういうささやかな反応が、ボランティアの大きな励みになります。

田畑の中を片付けても、水路が埋まったままでは水を流すことができません。実際に農業や漁業を再開するためには、いろいろな課題を解決せねばならず、その一つひとつに人手が必要です。



大きな瓦礫はあらかじめ撤去されていますが、それでも瓦礫の中から10人がかりで運ぶような鉄骨が見つかることもありました。



片付けた土地は、農地や宅地として少しずつ再生しています。離農したり、東北の地を離れたりする人も多い中、少しでも目に見えるかたちで成果があげられれば、「自分もここで頑張ってみよう」と思う人も出てくるはずです。

員は、陸前高田市の小友町の水田復興のため、水路に詰まった泥を取り除き、土の中の釘やごみなどを拾う作業に参加した。一面に広がった美しい水田地帯から広田崎周辺は、かつては散策の場としても人々に愛されてきた。以前のような風景を取り戻すためには、どうしても人の手が欠かせない。

「一年半以上経ったのに、まだやるべきことが多く、その割にはボランティアが集まっていない現実にはショックを受ける学生もいます。どれだけ一生懸命作業しても、達成感よりもやり残し感のほうが大きいでしょう。学生には『二人ではそんなにたくさんさんのことはできないし、だからこそ可能な範囲でこれからも参加し、復興にかかわっていけばいい』と話しています」（永山）

持久戦化した復興に多くの人々がかわり続けるためには、大学や企業、地域などに、ボランティア参加への窓口が数多く用意されることが重要だと永山は考える。

「農地のがれきを拾う人手が足りないために離農する人もいます。東北の魅力である農業、漁業の復興には多くの人手が今後必要です。支援を必要とする人がいる以上、私たちは手伝いたいと思いますし、それを東京経済大学ののぼりを立てて行うことに誇りと喜

の状況を学内で共有し合い、理解しているからだろう。

だが、全国に目を向けると、ボランティアへの参加者は大きく減少している。全国社会福祉協議会の調査では、岩手・宮城・福島3県の災害ボランティアセンターで受け付けたボランティア活動者数は、震災発生から8月中旬まで、1か月あたり11万2700人、18万1000人で推移した。しかしその後は減少し、2012年11月11日までの1か月ではその数は1万7700人と、ピーク時の10分の1以下までに減ってしまっている。

「去年の夏などは、ボランティアを乗せた大型バスが全国から集まり、駐車場が足りないほどでした。ところが、いまはそういう風景を見ることはありません。被災地を訪れるボランティアの数は明らかに減り、熱気も少なくなっています」（東京経済大学・東日本大震災復興支援職員有志の会 永山和彦会長）

生活者の目で 細やかに復興を考える

際に被災地に立つことで実感できる。復興への持久戦は始まったばかり」と永山は言う。ボランティアに参加した学生、職員には二度、三度と被災地を訪れる者も少なくないが、事実、彼らが共通して口にする言葉は、「進んでいる部分は確かにある。だが、まだまだやることはたくさんある」ということだ。

震災から2年近くが経とうとしており、確かに現地の様子は大きく変化している。被災地の市や町、村の中心地域での瓦礫の撤去は一段落していることは実際に現地に立てば一目瞭然という。津波で流されてきた自動車が山積みになっているような風景は徐々に少なくなり、市街地の多くは更地になっているが、だからといって以前のような生活を送れる環境を取り戻したわけではないと永山は説明する。

「一見、きれいに片付いた土地も、地表をよく観察してみると、細かいガラス片や砂利がたくさん含まれていることがわかります。もちろん、このままでは宅地にも農地にもできません。こうしたガラス片や砂利は、重機で除去するのが難しく、人が地道に掘り出し、分別していかねばいけないのです」（永山）

昨年の夏、東京経済大学の学生、職

被災者の生活を 想像する力が必要

被災地の現状を見つめ、支援を考えると、今後ますます必要になってくるのは想像力だと永山は言う。

「第一次産業にたずさわる人たちが多い東北では、都市が復旧しても地域全体が復旧したとは言えません。港が修復されても、漁師の網が使えないままでは漁は再開したとは言えないでしょう。復興しているように見えても、私たちが気づかない問題点は実はたくさんあります」（永山）

産業の復興だけでなく、生活の中の潤いを取り戻すことも大切だ。復興庁によると2012年11月1日現在、仮設住宅などに入居する避難者の数は全国で30万人余。学校のグラウンドに建てられた仮設住宅での生活に避難者はどんな不自由を感じているのか、そして駆け回っていたグラウンドがなくなったことで、子どもたちにどんな影響が生まれているかを想像することで、新たなボランティア活動が生まれてくると永山は考える。そうして想像し続けることが、震災の教訓を次の世代に引き

現代若者 「日本語」 事情

知の拠点として

日本語の総合的な運用能力を測る「日本語検定」。採用にあたって、検定認定者を評価する企業も多いこの検定試験において、東京経済大学は2012年度、団体優秀賞を受賞した。主に1年生を対象にした「文章表現基礎」を担当し、本学学生の日本語運用能力の向上に取り組む上野麻美准教授に、「現代の若者と日本語」についてインタビューした。

正しい
日本語ですか？



「語学中心でなく、
「総合的な能力」を育てる」

「行けな」
「いざ入る」

正しい日本語に
こだわる場を与える

日本語検定合格を一つの目標にしている「文章表現基礎」は、私を含めて6名の教員が担当し、17クラスを開講しています。選択科目ですが非常に人気が高く、定員を大きく上回る希望者が集まります。

この科目が人気を集める理由に、学生の「自分の日本語に対する不安」があると思います。授業では、最初に自己紹介文を書きますが、「文章を書くのが苦手」「この授業を通して自分の日本語力を高めたい」と書く学生がとても多いです。正確な日本語表現が苦手だという自覚があるということは、それだけ言葉による表現に関心がある学生が本学には多いと言えるかもしれません。

日本語検定には語彙や漢字、敬語などの6つの出題分野があります。中でも、敬語や文法は短期間でもしっかり学ぶことで、日本語検定の点数が飛躍的に伸びる分野です。授業を受ける前と後とで、学生に変化が一番あるのは、敬語、文法なのです。

最近は若者の言葉の乱れがよく話題になります。それは、「正しい日本語」「美しい日本語」に接する機会が非常に少ない環境にいまの若者たちは生

上野 麻美 東京経済大学経済学部 准教授

うえの あさみ◎東担当科目は「日本文学」「日本語表現」「文章表現基礎」。専門は日本文学、説話文学、仏教文学。

震災から1年半を経て
これからが大事と実感

震災から1年半以上経ったいまでも、宮城県の南三陸町は人が住める状態ではありません。「被災」「復興」「ボランティア」といった言葉はすでに世間から遠のいてしまっているようですが、本当はいま、そしてこれからが大事なのだと思います。私も本当はもう少し早く行っていればと後悔の念もありますが、このタイミングで大学のボランティア活動に参加できて本当に良かったです。留学生とかかわりが持てたことも勉強にもなりました。次回は、もっと現地の方とたくさん交流したいと思っています。(経済学部4年男子)

学生たちが
見たもの・
感じたこと

震災から
1年半

できることは小さくても
微力は無力ではない

瓦礫の仕分けや草むしりなどやるべきことは山ほどあり、全然時間が足りません。地面を掘れば生活用品などが出てくる現状に心が痛みました。このような作業を現地の方々にさせるのは酷だとも思いました。被災地に対する「一緒に頑張ろう!」という思いは、震災直後より風化しつつあります。私たちができるのは小さなことかもしれませんが、微力は無力ではありません。東経大がボランティア活動をした場所が畑になったと聞き、感動しました。小さなことしかできなくても、少しでも力になりたい、と思います。(コミュニケーション学部2年女子)

仕事を失った人々の
生きがいづくりも課題

南三陸町の壮大な地に見えるものは、瓦礫の山、家の基礎部分、トラックや重機のみで、1年前と何も変わっていないという印象を受け、これが現実なのだと思い知らされました。土を掘れば掘るほどガラスや生活用品などさまざまなものが出てきます。子どもたちが気軽に泥遊びできる日は、いつになったらくるのだらうかと思いました。仙台市のボランティアセンターでは、地元のおばあちゃんたちが作ったキーホルダーが販売されていました。田畑を失い、仕事を失った被災者の生きがいづくりも深刻な問題だと感じました。(経営学部4年女子)

留学生に支援の輪を広げ
支援を計画的に続けたい

地震が少ないベトナムから留学してきた私にとって、今回のボランティアは貴重な経験でした。寒い時期のせいかボランティアは少なく、被災地のことが忘れられている感じがしました。復興までは時間がかかるとは思いますが、一人でも多くの人が被災地のことを忘れずにいることが大切だと思います。私は、自分の目を見て、聞いて、考えたことをたくさんベトナム人留学生や日本に住んでいるベトナム人に伝えて支援の輪を広げ、東北でのボランティア活動を計画的に行えるようにしたいです。(経営学部4年男子留学生)

継ぐことにもつながる。「大学で働く私たちは、被災地の高校生の困難な境遇をいつも想像します。東北では、いまでも多くの高校生が仮設住宅から長時間かけて学校に通っています。当然、勉強に充てる時間も少なくなり、大学入試でも不利です。入学科や授業料を軽減するなどの支援はとても素晴らしいことです。が、それだけで高校生が不利益を被っていないと考えるのは早計だと思います。私たちにできることはなにか、もっと被災者の生活を想像し、考え、行動したいと思っています」(永山)

ている活動内容をイメージしやすいように、写真や動画などを活用して広く伝えていきたいです。これまでも、学生に対する説明会などでは写真や動画を紹介しているのですが、言葉よりもよく理解できるようです。実際、説明会に来てくれた学生の多くは自分が何ができるのかがわかって不安もなくなり、毎回、高いボランティア参加率に結びついています」(永山)

「現状を甘く考えることもできないが、希望を失ってもいけない」。そう自分に言い聞かせながら、東京経済大学のメンバーたちは、それぞれの思いを抱え、これからも被災地に赴く。



東京経済大学・東日本大震災復興支援職員有志の会会長 学生課 永山和彦

きているからだとは考えます。 いまどきの中・高生は、学校の先生に対して「タメ口」が珍しくないと思います。せいぜい、「です」「ます」で結ぶくらいです。これでは、敬語はなかなか身につきません。

またテレビでは、いわゆる「ら抜き言葉」「れ足す言葉」が横行しています。さらに、いまの学生は、本を読むといってもライトノベルズやケータイ小説など、話し言葉に近い文章で書いてあるものばかりです。インターネットが発達し、なんでも「検索」できる時代、自分の興味を満たすた

めに時間をかけて一冊の本を読む必要性も少なくなっています。学生のみならず現代人の日常に、じっくりと書物に向き合う時間、知的なゆとりがなくなっていることも感じます。

こうした社会に生きているからこそ、文章表現基礎の授業で、正しい日本語を指導することは、学生の成長にとって重要だと思います。授業で学んだ敬語を使って、目上の人にあてた手紙文を書く練習をするのですが、こうした経験は就職活動にも生かせるでしょうし、実際に仕事をしていくうえでも役立つはずです。過去に文章表現基礎を

検定問題に 挑戦！

日本語検定には、小学校低学年から社会人までを対象に、1～7級の試験があります。ここでは、高校生・大学生・社会人を主な対象とする3級（中級Ⅰ）の問題をご紹介します。

※各問の正解は、10ページ下に記載しています。

問題／敬語

【 一 】のような場面で、それぞれの（ ）部分はどのような言い方をすればよいでしょうか。最も適切なものを選んで、①～③の番号で答えてください。

- 問一 【取引先に、打ち合わせを要望する】
よろしければ来週中に（ ）。
- ① お目にかかれませんかでしょうか
② お目にかかっていただけませんかでしょうか
③ お会いしてくださいませんかでしょうか

問二 【医者が、患者に指示する】
あせらずご自分のペースでリハビリを（ ）。

- ① いたしてください
② されてください
③ なさってください

問題／文法

次のようなことを言うとき、――部分の言い方は適切でしょうか。適切である場合には○、適切でない場合には×で答えてください。

- 問一 旅行代金の計算には、空港使用料も含ませていただきました。
- 問二 ふだん料理をしない彼に、釣った魚をさばかせたのは、間違いだった。
- 問三 三浦くんに交渉を任せれば、相手方をちゃんと説得してこられるだろう。

ますが、書き直しは宿題です。合格印が押されない限り、何度でも家で書き直さなければなりません。これまでで最多は7回の書き直しでした。

書き直しは教師にとっても学生にとっても大変です。しかし、書き直す過程でこそ、文章を書く力が身についていきます。添削されて赤だらけになった文章をただ眺めて「なるほど、そうか」と理解するだけでは、書く力は身につきません。教える側が手を掛けて、学生自身に自分の文章がどう変わっていったのかを把握させることが大切です。だから、授業では、赤が入った原稿の上に書

き直した原稿を重ねていき、ホチキスでとめさせています。

課題を積み重ねていく中で、学生が書き直す回数には確実に減り、添削にかかる教師の手間もだんだん減っていきます。1回で合格する学生も出てきます。こちらが手をかければ、学生の書く力は確実に高まっています。

社会全体の伝える力が 低下している

文章を書くことに対する苦手意識を克服させよ

履修した学生が、就職活動を行う中で、「あの授業で学んだことが役立っていると実感しています」と私に話をしてくれることは珍しくありません。

手を掛ければ 書く力は高まっていく

文章表現基礎では、文章を書く指導も行います。日本語検定試験の勉強を通して日本語の運用能力を身につけたら、その能力を使って、自分の意見を論理的に表明する文章を書けるようになるう、というわけです。

いきなり長い文章は書くのは大変ですから、最初は600字の小論文から始めます。最初のうちは、学生が書く小論文は説明不足で、ひとりよがりなものが目立ちます。書いている本人にはわかるのだろうが、第三者が読むと何が言いたいのかわからないという文章です。また、意見を述べるに当たってはその根拠を示すように指導しますが、根拠のつもりで示したものが実は根拠になっていないこともあります。

そこで私は「主語が抜けているから誰の行動かわからない」「そう考える根拠がどこにも書かれていない」というように、学生の書いた文章を細かく添削します。甘い目で見れば「きつとこういうことを言いたいのだろう」と察することはできるのですが、あえて意地悪に指摘するわけです。赤ペンでたくさん修正指示や疑問を書き込んで、同じ文章を合格するまで何回も書き直させます。最初に書くときは授業時間内に書くように指導し

うと、いま、どの大学でもレポートをたくさん課しています。レポートを課すことは確かに大切なことですが、たくさん書けばそれだけでうまくなるとは限りません。学生がいつまでもうまく書けないままなら、教師は「最近の学生にはやはり文章力がない」と嘆くほかありません。

学生も、自分の文章がよくないことはわかっているけれど、よくするためにはどうしたらよいかわからず、文章を書くことにさらに苦手意識を持って卒業してしまふ……。そんな悪循環を早期に断ち切るためにも、どう書いたらよいかを学生が丁寧に教わり、正しい書き方の練習を積み機会を大学が意図的に設ける必要が、いま日本の大学にはあるのだと思います。

学生の書く力の低下には、社会的な背景があると私は考えています。普段から友だち同士で「私はこう考える。なぜなら……」と意見を交わしていれば、意見と根拠をセットで述べる習慣が自然と身につくでしょう。

しかし、いまの学生は友だちとの間で議論することが減っていると言われています。世の中のことに対して意見を持っていないわけではないけれど、友だちと熱く意見をぶつけ合う機会が少ないようです。いま、私たちの社会は原発の問題など、じっくりと腰を据えて話し合うべき課題を多く抱えています。こうした時代だからこそ、私たちは、意見とともに根拠を述べることができる若者を育てなければいけないと思います。

最近では学生に限らず、根拠を述べずに意見だけを通そうとする人が多いように感じます。強い言



知の拠点として

業で押し通そうとして、それがかなわなければ激昂し、最後には「どうせあいつにはわからない」と断絶する。近頃の社会はどうもぎすぎすしている人多くの人が感じていると思いますが、伝える力の低下と社会のありようが大きく関係しているように思えてなりません。

大人たちの中には「勉強しない学生がダメなのだ」と、問題を学生個人の問題にしてしまう人もいます。しかしいまの学生は、普通に生活している限り、そういうふうになってしまっているのではないのでしょうか。東日本大震災以降の学生たちの行動を見ても、学生たちには社会貢献の意識はあり、



また、もっと世の中をよくしたいという気持ちを持つていると思います。しかし、意見はあるけれど、それを伝えるための方法を知らない、そういうかわいそうな状況なのだと思うのです。

書く力が学生の学びを豊かにする

1年次に論理的な文章を書く訓練を積むことで、就職後に必要な社会人基礎力が身につくだけでなく、2年次以降の大学の学びも豊かになります。

実際、授業を受ける中で、長い文章を書くことに対する抵抗が学生たちからなくなっていく。長い文章が書けることを実感できるようになってくると、学生に自信が生まれます。ほかの授業で課されるレポートにも自信を持って臨めるはずで

す。何も指示しないで自由に文章を書かせると、段落を分けないで延々と書く学生も少なくありません。そういう学生の文章は、ただ思いついたことをそのまま書き連ねてあることが多く、その学生の思考の中に「段落」が必要ないのかもしれない。

しかし、授業を通して段落というものの存在を強く意識するようになると、どういう順序で考えを述べると相手に伝わりやすいかがわかるようになります。頭の中でも、序論、本論、結論といったように論理を展開できるようになるのです。

学生は、本学での4年間で授業やサークルなどでさまざまな体験をし、多くを学ぶはず。就職試験では面接や論文を通してそれを他者に伝え

ることになりますが、せっかくよい経験をし、素晴らしい気づきを得たのに、それを相手にうまく伝えられないとしたら本当にもったいないことです。

私は、グローバル化が進むこれからの社会においても、日本語の文章をしっかりと書ける力は重要になってくると思います。「国語力のある人は英語力も高い」ということは、本学の英語の先生とお話しても意見が一致します。日本語の文章をしっかりと書けるということは、自分の考えたことを言葉で説明する訓練ができているからであり、それが使う言語が日本語から英語になるだけの話だからです。

数学者の藤原正彦氏が著書『祖国とは国語』（新潮社）の中で「英語が話せる日本人は確かに増えたが、内容のない浅薄な会話をただ英語でするようになっただけではないか」といったことを述べています。流暢な英語だけれど、内容の浅いことを話されるよりも、たとえ拙い英語であっても、考え抜いたしっかりとした意見を述べる人の話に耳を傾けたい……どんな国の人であっても、知的な人ほどきつとそう考えるはず。

しっかりと考え抜いた意見を、相手にわかるような言葉で伝えられる力を学生に養うことで、グローバル社会を生きるための自分のよりどころ、思考の根幹を育てたいと願っています。

■正解
【敬語】問一① 問一② 【文法】問一× 問一〇 問三〇〇

東経大の 社会貢献 2

学生目線のまちおこしで

国分寺を元気に！

もっとも



地元の主婦や学生などから応募されたレシピは書類審査を経て、本戦へ。富士ゼミの学生は企画から運営までをすべて取り仕切りました。

最優秀賞は「ごちそう野菜碗」。多種類の国分寺産の野菜が使われ、しかも素材が味が活かされていると審査員、一般参加者から好評でした。

「学外の人とかかわり、社会で求められるコミュニケーション能力がなにかがわかった気がします」経済学部3年 石川貴明さん



農業の視点から 国分寺の魅力を発信！

コミュニティ経済学を学ぶ富士ゼミは2012年度、二つの学内GP（グッド・プラクティス）を地域・社会貢献領域において取得しました。そのうちのひとつが、昨年11月18日に開催された「N-1グランプリ」国分寺野菜を使ったレシピコンテストです。N-1のNは「農業」。地元・国分寺産の野菜を生かしたレシピ（調理法）を市民から募り、最優秀賞（商品券3万円分）1作と、優秀作（同1万円分）2作を決めるイベントです。

国分寺は中央線が止まる利便性を持ちながら、農家の軒先で地場野菜が売られている風景も目にできる自然豊かな町です。しかし近年、農業従事者の高齢化や後継者不足、宅地化などを背

「地域に開かれた大学」から「地域をつくる大学」へ……東京経済大学でも国分寺市民とともにまちづくりのためのさまざまな取り組みが行われています。今回は、学生らしいユニークなアイデアと軽やかなフットワークで「学生の地域貢献」を考え、実行する富士正博・経済学部教授のゼミの活動を紹介します。

景に、国分寺の農業は年々衰退しています。そんな中、国分寺産の野菜を使ったレシピコンテストを行うことで、地元野菜の魅力を広く知ってもらうおうと富士ゼミの学生たちは考えました。「富士ゼミでは、行政と市民との討論会『ぶんじとく』の企画運営も行っています。この場でゼミ生が『立川のうど、小平のラベンダーのように、国分寺を代表する野菜を発掘し、地域資源として確立したい』と構想を語ったところ、国分寺市経済課のかたが興味をもってくださったのです」と、「N-1グランプリ」の責任者である石川貴明さん（経済学部3年）は、イベント誕生の経緯を説明します。

グランプリ会場はJ-A東京むさし・国分寺支店。地域で飲食店を営む方や料理教室の主宰者、野菜ソムリエなど「食のプロ」を審査員に招き、観覧者

担当教授より



経済学部
福士正博 教授

まちで鍛えられることで
学生の学びがたくましくなる

まちおこしのアイデアはすべて学生から生まれたものであり、私から「こうしなさい」と指示することはありません。ただし、「もっとやろう」とけしかけることはあります。N-1グランプリも「構想だけにとどめてはおもしろくないので行動に移そう」とプッシュしました。いわば、私もまちおこしを楽しむ仲間の一です。

学生らしい思いつきは大切ですが、それが社会の厳しい目にさらされ、練り上げられる中で学生は成長していきます。N-1も、最初は「500円のガッツリ丼物」がコンセプトでした。しかし市民から「老若男女が関心を持てる企画にすべき」「野菜の魅力をどんぶりで生かせるのか?」と批判されました。学生は大いに試行錯誤しましたが、そういう経験が社会に出て、仕事で思い通りにいかないときなどに役立つはずですよ。

学生にとって「なぜ学ぶのか」を自分の頭で考えることは大切です。まちへ出て、人とまじわりながら、自分にどんな力が必要なのか気づいてほしい。そうすれば、授業中に「先生の考えは違うと思う」と学生が言い出すような、もっと緊張感のあるゼミが実現するでしょう。



「誌面と連携したwebサイトを立ち上げるなど、読者との双方向性を高めたい。ゼミの後輩たちもやる気満々です」経済学部3年 佐京美咲さん



フリーペーパー
『BOON!!』

らぶんじワークショップ



福士ゼミは「ぶんじとく」の他、国分寺の地域おこしにも参加



現在制作中のフリーペーパーの表紙と記事。『BOON!!』という誌名には、国分寺の「ぶん」と、「恩恵」を表す英単語の二つの意味があります。

まちの人々をつなぐ フリーペーパーを発行!

学内GPを取得した福士ゼミのもう一つの取り組みが、国分寺のまちづくりに携わる人たちの取り組みの紹介と交流を目的としたフリーペーパー発行

の目の前で実際に調理しました。「応募作のレベルは高く、イベントも盛り上がりました。やりがいも大きかったのですが、準備から開催に至る過程では審査員のかたのスケジュール調整など苦労もありました。学外の人たちとかかわるなかで、社会で求められるコミュニケーション能力がなにかがわかった気がします。将来は、応募作を商品化するなど、市民の皆さんのアイデアをさらに地域振興に役立てたいと考えています」(石川さん)

です。2013年2月の創刊をめざして企画、取材、そして執筆といまも作業が続いています。編集長を務める佐京美咲さん(経済学部3年)は「本学の学生は、駅と大学を往復するだけの人がまだ多い気がします。国分寺のよさと、ここでまちおこしに取り組む人たちの魅力を広く伝える雑誌をつくりたいと思いました」と企画のねらいを説明します。

全部で16ページの誌面には、まちづくりの仕掛け人へのインタビュー、個性的な店舗のガイド、地域で活躍するNPOの活動紹介など、国分寺の魅力を再発見できるような多様な記事が並びます。

「まちづくりに対する市民の意識の高さは、国分寺の財産だと思います。今後は、誌面と連携したWebサイトを立ち上げるなど、読者との双方向性を高めたいです。ゼミの後輩たちもやる気満々です。来年もGPをねらいます!」(佐京さん)

福士ゼミではこのほかにも、産地としての国分寺の魅力をアピールするアンテナショップの立ち上げ、国分寺市のゆるキャラ「ぶんじほたるホッチ」と連携したイベントなどを企画。国分寺のまちに、東京経済大学の学生たちのアイデアと熱意が広まっています。



東京経済大学

www.tku.ac.jp

第45巻 第2号 2013年1月発行

●発行・編集 東京経済大学広報課 〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34
[TEL] 042-328-7900(直通) [E-mail] pr@s.tku.ac.jp